

静かに、穏やかに、年末年始の挨拶を認（したた）めようと思っていたら、なかなかそういった時間を生み出すことができず、気づくと今日はもう 21 日です。そして、これを書いている間にすぐ、22 日になりそうです。もうすぐ 2019 年が終わろうとしています。

＊

11 月 25 日（日）の朝、ぼくはソファに横になりながらタブレットで日本のニュースをチェックしていた。一枚の写真が目にとまる。原爆投下後の長崎で、亡くなった幼子を背負う「焼き場に立つ少年」。原爆が投下された直後、米海兵隊の従軍カメラマン、ジョー・オグネルさんにより撮影されたものである。訪日したローマ法王フランシスコが、この写真をカードに印刷して世界中に配布するよう指示を出していたという。カードの裏には、「戦争が生み出したもの」という言葉が記載されている。オグネルさんは撮影時の様子を文章でも記していた。

10 歳ぐらいの少年が、歩いてくるのが目にとまりました。おんぶひもをたすきにかけて、幼子を背中に背負っています。弟や妹をおんぶしたまま、広っぱで遊んでいる子供の姿は、当時の日本 でよく目にする光景でした。しかし、この少年の様子は、はっきりと違っています。重大な目的を持ってこの焼き場にやってきたという、強い意志が感じられました。しかも裸足です。少年は、焼き場のふちまで来ると、硬い表情で、目を凝らして立ち尽くしています。背中の赤ん坊は、ぐっすり眠っているのか、首を後ろにのけぞらせたままです。

少年は焼き場のふちに、5 分か 10 分、立っていたでしょうか。白いマスクの男達がおもむろに近づき、ゆっくりとおんぶひもを解き始めました。この時私は、背中の幼子が既に死んでいる事に、初めて気付いたのです。男達は、幼子の手と足を持つと、ゆっくりと葬るように、焼き場の熱い灰の上に横たえました。

まず幼い肉体が火に溶ける、ジューという音がしました。それから、まばゆい程の炎が、さっと舞い立ちました。真っ赤な夕日のような炎は、直立不動の少年のまだあどけない頬を、赤く照らしました。その時です。炎を食い入るように見つめる少年の唇に、血がにじんでいるのに気が付いたのは、少年が、あまりきつく噛み締めている為、唇の血は流れる事もなく、ただ少年の下唇に、赤くにじんでいました。

夕日のような炎が静まると、少年はくりときびすを返し、沈黙のまま、焼き場を去っていきました。

いつのまにかぼくは、ソファから立ち上がっていた。写真の少年の口元だけでなく、手の指がまっすぐに伸ばされ硬くなっていることに、怒りさえ覚えたのだ。むろん、戦争という、人が人を殺すという行為の醜さや酷さに対してである。戦争ということばで包装された殺し合いという行為は時に正当化さえされてしまう。

法王の長崎・広島でのスピーチを聴く。少し前、広島には現職としては初めてオバマ米国大統領が訪れた。それは確かに感動的であったが、違和感も覚えた。オバマは格好良く、スピーチがうまい。詩人のような言葉は、原爆を自然現象のようなものに変えた。その時ぼくは思ったのだ、政治家は詩人になる必要はない、みっともなく頭（こうべ）を垂れてくれないかと。法王はその後、天皇と首相に会った。その首相はオバマの訪日の際はぴったりとくっついてメディアに露出した。彼は今、核拡散にかじを切ったトランプという大統領へのほほえみを忘れることなく、ロンドンでは、国際会議でいつもトランプのそばにくっついている奇妙で滑稽な人物と言われている。皮肉なことに、法王が日本を訪れた時、史上初めて、兵器の国際見本市が日本で開催されていた。日本企業も 60 社が出展していたという。

＊

少し前の人権活動家マララ・ユスフザイ、そして今年の世界環境活動家グレタ・トゥーンベリといった少女たちが、清新な主張を大人たちに投げかける。それを冷笑し、攻撃する大人たち。そうなのだ、自らに自信のない者たちは奇妙で、気持ちの悪い冷笑を好むのだ。

＊

高橋源一郎さんの「二つの像が問う/弱き者への視線」（「歩きながら、考える」朝日新聞 2019.12.19）を読む。いわゆる「慰安婦像」の名称が正しくは「平和の少女像」であり、この像の作者はまた、ベトナム戦争における、韓国軍の民間人虐殺の犠牲者を鎮魂するための像「ベトナムのピエタ像（母子像）」の作者でもあると知る。日韓の対立という政治の駆け引きを超えて、もっと大きく平和をとらえようとする祈りが見える。

ぼくたちはもっと目を見開いて、大きな安らぎを見つけなくてはいけない、創っていかなくてはならない。隣で手をつなぐ人がさらに他の人と手をつなぎ、黄色い手と黒い手が、黒い手と白い手がお互いの体温の温かさをしっかりと感じるような、そういう新しい年がやってくるといいなあと思う。

あたたかいクリスマスとすばらしい新年をお迎えください。
英国国際教育研究所 所長 函師照幸（2019.12.21/22）

Message

2019-2020

